

非類似者への対人魅力と自己の多面性について

要旨

徐 珂

好き嫌いは人間関係の最も基本的な感情であり、好き嫌いを抜きに人間関係は考えられない(齋藤, 2003)。心理学では、英語の Interpersonal attraction を日本語で対人魅力と翻訳しており、対人魅力とは、他者に対する肯定的もしくは否定的態度と定義されている(Berscheid & Walster, 1978)。これまでの研究には、対人魅力に影響を及ぼす決定因が数多く検討されてきたが、特に類似性が対人魅力へ影響することが認められている。容姿や態度、能力や性格などの特性が他者と似ている度合いを類似性と呼び、Byrne は態度の類似性と好意度の関連を検討し、「類似性—魅力仮説」を提唱した。つまり、対人魅力は態度の類似度の一次関数であり、類似度が高いほど対人魅力も高いのである (Byrne, 1961)。

それに関する解釈に代表的なものとして、Byrne (1966) は合意的妥当性 (consensual validation) という概念を挙げ、他者の態度と自己が類似していることは、環境に効果的に適応していくため、環境内の事象を論理的、正確的なものとして解釈したいということに合意的妥当性を与える動機を持ち、報酬としての他者に好意的な感情を抱くようになる。逆に、非類似者の場合は、罰としての他者に非好意的な感情を抱くようになるというものである (Byrne, Nelson & Reeves, 1966)。

一方で、Snyder & Fromkin (1980) が提唱した独自性理論 (Theory of Uniqueness) では、人間の基本的な欲求として他者とは異なるユニークな存在でありたいという独自性欲求 (Need for Uniqueness) がある。自己とあまりにも類似した他者は、独自性を脅かす存在であり、否定的な情動反応が喚起されると予測する。以上のように対人魅力へ影響する要因をまとめてみると、類似説を支持したのが多数であるが、非類似の他者が好まれる可能性と状況もあると示唆された。

ところで、James (1892) によって状況や相手に応じて、自己が表現する行動が変動すると示唆され、そこから抽象される多様な自己概念が存在してい

ることは自己の多面性 (self-multiplicity) と呼ばれた。状況や相手によって自分の行動が変動し、それを認識することで形成された自己概念が多様化することである (Suszek, 2007)。Donahue (1993) は自己概念の分化度 (Self Concept Differentiation, SCD) モデルを提出し、自己概念の分化度が高いほど、自尊感情が低く、抑うつ傾向が高いと指摘し、自己が一貫しているほど精神的に健康であることを支持した研究もある (吉田・高井, 2008)。

以上を踏まえて、多面的な人はより高い適応性を持つことで、非類似の他者を脅かす存在として見なす傾向がなく、受容性が高いと考えられ、非類似の他者にも魅力を感じると予測する。一方、一貫しており、自己の安定性が高い人は、不安にさせる非類似の他者に対して排除する傾向があり、受け入れの程度が低いだろう。本研究では自己の安定性と対人魅力の関係を検討したうえで自己の多面性と対人魅力の関係について検討していく。

調査 1 で藤森 (1980) の対人魅力尺度と小塩 (2001) の自己像の不安定性尺度を使用し、類似者と非類似者の魅力を捉えるため、初対面の人が自分と似ている、似ていないという 2 つの場面を設定し、調査対象にそれぞれ想像してもらいながら、質問紙項目の回答を求めた。その結果、類似性が高いほど、対人魅力も高いという理論を支持したが、対人魅力と自己像の不安定性と有意な相関がみられなかった。調査 2 で自己の多面性の測定を加えたうえで、調査 1 と同様の尺度を使用した結果、自己像の不安定性が高い人は、類似者への魅力 (承認) が低い傾向があった。非類似者への魅力 (承認) (交遊) (共同) が高く評価する人は、類似者へもっと高く評価し、類似者へより高い好意を持っていることが示された。

また、自己の多面性が類似者と非類似者への魅力度との相関が得られなかったが、友人がいる時多面的な人はより類似者に親しみを感じるが、非類似者へ親密感が低下することがみられた。友人の前で変化する、多面的な人が非類似者へ親しみをあまり感じなく、嫌いな傾向であるが、変化しない、安定している人のほうが非類似者へ親しみがわくと考えられる。しかし、仮説と一致していない原因として、対人場面を想像したうえで、質問項目へ回答を求めた方法で行ったため、非類似者との接触過程について親密さや好意の程度を正しく判

断できない可能性があると考えられ、より適切な調査方法で検討が必要である。また、自己像が不安定な者は、自己を評価する際の基準が曖昧であり、自尊感情が変動しやすいと同時に、他者から肯定的な評価を求め、妥当性を表現する類似者に好意が高く、非類似者が嫌いになる。逆に自己が安定している人は外界からの評価など期待していないため、非類似者への好意が高くなるだろう。さらに、対人魅力の親和的な魅力判断次元において、多面的な人より、安定性が高い人は非類似者が好まれるという可能性が示唆されるが、これから詳しい調査で検討することが必要だろう。

非類似者の場合には一人でいる時に誠実性が高いほど非類似者への承認が高く、その魅力度が高い傾向があり、親がいる場合において誠実性が低い人は非類似者への承認が高く、開放性が低い人は非類似者との共同意欲が高まる傾向がみられた。また、初対面の類似者に対し、親がいる場合により外向的な人は、類似者への親密が高く感じ、情緒の不安定性が低いほど類似者への親密の程度が高まる傾向である。そして、親と友人の存在が自己の多面性の表出、対人魅力へ影響を与えることや、開放性が低い人は、非類似者との共同意欲が高まるという予想以外の結果について検討が必要である。自己の安定の程度について今後より適切な尺度で測定することも必要だろう。